

20. 狂歌略画百人一首【きょうかりゃくがひゃくにんいっしゅ】(外)

(刊)半紙本一巻一冊

刊年未詳

(江戸)弥生庵雛群【やよいあん・ひなむら】撰

(江戸)桃本庵雛亀【もものもと・ひなかめ】撰

(江戸)鍬形**蕙**齋【くわがた・けいさい】[画]

[江戸]巴水連【ほすいれん】蔵

[江戸]桃本連【とうほんれん】蔵

彩色版



扉題は「(角書)狂歌／堀川太郎題百人一首」。撰者の雛群は三代目弥生庵(通称・君塚藤兵衛、慶応三年(1867)没)か。江戸の大坂町にて茶亭を営んでいたという(狩野快庵『狂歌人名辞書』)。一方の雛亀は桃江園雛亀と号した後、桃の本鶴盧と号したらしい。通称細木【さいぎ】藤兵衛(安政三年(1856)没)。江戸山城河岸の富豪で、幕末戯作者のパトロンとしても有名。

本書は序文(一丁)の後、前半十二丁は、巴水連、桃下連の狂歌師の歌が個々に色紙形中に描かれ、その余白には扉に「鍬形**蕙**齋先生古図」とある如く**蕙**齋の略画によって百人一首の絵姿の狂歌師達が計十二名。後半丁は、弥生庵雛群および桃本庵雛亀の撰による「堀川太郎題狂歌百人一首初会」。刊記がないのは、狂歌連を中心とした配り本だったためか。撰者の活動期を考えた場合、**蕙**齋没(文政七年(1824))後に遺された「古図」を使用して幕末に刊行されたものだが、その「古図」とは文化十二年(1815)刊の『手習百人一首』で、その内の二十名分(十丁)の板木を流用したもの。『手習百人一首』は**蕙**齋絵本の内の最稀本である。